

# プロレタリア通信

第15号

1989年2月15日  
1部100円

〒170-91  
東京豊島郵便局  
私書箱59号

発行「プロレタリア通信」編集委員会  
☆万国の労働者団結せよ！  
被抑圧民族の解放  
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義  
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設

## 侵略の象徴 天皇制を打倒せよ！

昨年九月から重体に陥っていた天皇ヒロヒトが遂に死んだ。天皇主義勢力が全国の神社に祈禱をさせ、皇居や各自治体に記帳所を設けさせて何百万人もの人々を動員して天皇の病氣回復を祈らせたが無駄であった。人民にとってこの三ヶ月間は「自粛自粛」の三ヶ月間であり、日本帝国主義に侵略された諸外国からの戦犯天皇ヒロヒトを糾弾する論調の連続によって、人々に改めて天皇ヒロヒトの戦争責任について考えさせた三ヶ月間でもあった。その中で人々は様々の反応を示した。記帳所に行く人、過剰警備に抗議する人、「天皇ヒロヒトの戦争責任」を公人として発言している長崎の本島市長に賛成する人、反対して支庁舎に武器をもって押しかける右翼の姿、等々。

このように天皇ヒロヒトについての議論が沸騰している現在、我々は自分の立場を鮮明にし、より一層天皇制打倒闘争を推進してい

かなければならない。

自民党政府は天皇ヒロヒトの死にあたり冷静に素早く対応した。(この日に備えて入念に練ってきた計画に対する修練のたまものであった。)ヒロヒトの死を発表すると同時に息子のアキヒトを新天皇に即位させ、元号も「昭和」から「平成」に変え、新しい時代が始まったかの如く演出している。

又、もう一方では、海外からの「戦犯天皇」ヒロヒト「糾弾の声を一日でも早く人々の頭の中から払拭せんとして、あらゆるマスコミを動員して「生来の平和主義者」「学者天皇」ヒロヒトの特集を組ませて戦犯天皇を平和主義者であったかの如く思い込ませようとしている。と同時に新天皇アキヒトの特集も組ませ、向こう二年間にわたる「代替わり」儀式の連続攻勢で「象徴天皇」アキヒトの下に人民を再結集せんとしている。又、その上で新元号「平成」の語意の中に込めた「うち平らげて外成る」

(「侵略」体制をもって「経済大国にふさわしい政治的役割を果していかなければならない」という名目の下に国際社会にうって出ようとしているのである。

(「侵略」体制をもって「経済大国にふさわしい政治的役割を果していかなければならない」という名目の下に国際社会にうって出ようとしているのである。

天皇ヒロヒトの戦争責任  
事実をして語らしめよう

ヒロヒトキャンペーンの中で特徴的なのは「根っからの平和主義者」「学問を愛した天皇」「マッカーサーの前に自分の身を投げ出して国民を救った終戦エピソード」を全面に出して「戦犯天皇」ヒロヒトを平和主義者にすりかえていることであろう。このキャンペーン自体は今回に始まったことではない。敗戦直後、中国革命の前進、ソ連軍の予想以上の素早いアジアへの転戦を横目に見ながら日本を如何に効果的に占領するかというアメリカ帝国主義と最悪の事態でも「天皇制」だけは残したいとす

るヒロヒトとその側近グループとの妥協の産物として「天皇制存続」を決めた時にも大々的に行われ、以後、自民党政府の政治危機のたびごとに強調され今日に至っているのである。

このキャンペーンの中で戦中派世代は自分らが参加させられ犠牲にされてきた戦争についての真相を全く知らされることもなく、敗戦後も生活していくのが精一杯で政治について深く考えることを許されなかつたが為に「天皇ヒロヒト」平和主義者「キャンペーン」を受け入れてきたのであり、今もヒロヒト、アキヒトを情情的に支えている中核隊である。

天皇ヒロヒトの死の翌日、開かれたキリスト教会主催のある集会の席上で一人の清掃労働者(戦後生まれ)はこの戦中派世代との間で天皇ヒロヒトの戦争責任について議論し合うことの難しさを次のように訴えていた。「職場で五十代の人と天皇ヒロヒトの戦争責任について話をする機会があったが向こうは『日本で一番偉い人』というばかりで見解は平行線を辿るばかりであった」と。これを聞いていて、私と母との間でも似たようなやりとりをかわしたことを思

### イヌクラ

一月二三日、「柴田救援ビデオ集会」があった。

二次会の席上自己紹介で「敵はなんとなく右へ右へと世の中を引っ張っている。我々も榮しきくなくなく敵を包囲するような陣型をつくらなければならぬのでは」と、深刻に話す御仁に、私はわが意を得たりと思つた。状況が困難であればあるほど、楽しく愉快にたかかわねばならない。このたかかわりに参加しないものは日和見だ。このようにたたかかわねばブントでない。この指とまれなどと自らの思想や運動をせよ、団結にミゾをつくるよりは、あらゆる職域・職場・工場で、あらゆる地方・地域、そして諸階層にあった創造的なたかかわりを援助することに私は賛成である。

言い換えれば、自分だけが闘っている。自分たちのたかかわりのみが唯一であるという思い上がりや、芸術の分野でのたかかわりもまた重要である。私が前衛たらんとするならば、どのような工場・地域にもでかけ一人一人の苦悩・たかかわりを共有したい。

ピョンヤンの仲間たち、そして柴田泰弘君がどのような政治主張を展開しているか無視するものではない。しかし反弾圧と闘う一点において救援活動を!

い出した。「外国では天皇(ヒロヒト)はヒットラーやムッソリーニと同じだからヨーロッパへ行つた時もあちちで卵や石をぶつけられているんだ」という私に「ヒットラーと同じなのは東條英機であつて天皇ではない」というのが母の言い分であつた。

このような世代に対して我々はどうか対応していかねばならぬか? ヒロヒトが如何に戦争に關わつていたのかの具体的事実の把握及びその宣伝でしかない。ここで思い起こされるのがパルコムユニオンについてのレーニンのエピソードである。レーニンは西ヨーロッパに於いて、パルコムユニオンの研究に励み、その全課程を暗記し、繰り返し同志達に話して聞かせ来たるべきロシア革命の正当性についての理論を打ち固めていったことであつた。我々もまたレーニンに学ばなければならぬ。過去、これまで左右を問わず天皇制に關するものを数多く集めてきたが満足できるものはなかつたように思う。小冊子が多く、書かれてある内容が部分的であつたからである。このような時に『ドキュメント・昭和の天皇』全六巻(田中伸尚著)を知つた。内外の第一級資料を六年間かけて収集したというだけであつて、天皇ヒロヒトの行状が生々しく描かれており、テキストとして最適であると思う。これによって具体的事実をしっかりと

り踏まえたいとて様々の天皇論を讀んでいけば正しい批評が出来ていけるだろう。その反対に、具体的事実をしつかり踏まえられない反天皇論はやたら心情に流され、真に多くの人々を納得させうるものとはなりえない。自己満足に注意しなければならぬ。

ここではマスコミでも認めている最低限の事実だけをあげるにとどめる。

- ①開戦内閣(1)当初、予定された皇族内閣に対しヒロヒトは「ノ」一として許可しなかつた。そのわけは「もしも負け戦になれば敗戦後、天皇の戦争責任が問われるのが必至だから」というものであつた。そこで即時開戦を唱えていたが他の誰よりもヒロヒトに忠実をもつて任じている東條に白羽の矢を立てたわけである。天皇はこの時「虎穴に入らずんば虎児を得ず」として敗戦覚悟で許可した。
- ②真珠湾の奇襲攻撃、続く東南アジアでの相次ぐ勝利に氣をよくしたヒロヒトは「あまり戦果が早く挙がりすぎるよ」と側近に言っている。
- ③しかし、間もなく米軍の反攻に会い、今度はあちこちで負けばかりになるよ」とどこかで米軍を叩きつけることはできないか」と軍部をしっかりとばしたが、どう研究しても名案はみつからなかつた。

④一九四五年一月、近衛文麿に停戦を進言された天皇は(このままのジリ貧では)天皇制を護持することは難しいからもう幾つかの勝ち戦を挙げてからでないとできぬ、と突っぱねてしまつた。これが為、沖縄の地上戦、広島、長崎への原爆投下という事態を招いてしまつたのである。目下、長崎市の本島市長は右翼の脅しにも屈せず、このことを指して「天皇の戦争責任」として追及しているのである。こういう質問に対しヒロヒトはずつと以前から「戦争中のことであるからさういふこともいた仕方ない」と居直つていたのである。

先にあげた「ドキュメント昭和の天皇」を讀んでもらえればヒロヒトが如何に三軍最高司令官として振るまつていたかがよく理解されることと思う。

新天皇アキヒトに

如何に対決していくか

成功しているかに見える。社会、公明、民社に言うに及ばず、戦犯天皇ヒロヒトに対しては果敢に闘つていた日本共産党でさえ新天皇アキヒトに対しては「率直に言つて闘いにくい」「象徴天皇制を今すぐ廃止せよなどとは一切言つてない」「平和憲法は守る」などと言つて逃げの一手である。こゝらあたりが「護憲」が精一杯の「議会政党」たる日本共産党の限界である。しかし、革命的人民はずで新天皇アキヒトに対しても憲法第一章(天皇条項)の削除を要求して新たな闘いに立ち上がつていく。我々もまた同じ立場に立つて象徴天皇制打倒に向けて闘い抜くものである。何故ならば故松本治一郎氏がいみじくも喝破された如く、天皇・貴族などという特権階級が存在するからこそ「賤民」も新たに作り出されるのであり、古来から「天皇制」はあらゆる差別の根源であり、今日においても全く同じ機能を果しているからである。我々は一昨年、反天皇闘争の一環として「天皇制とは差別なり」との信念の下に「反差別講座」を開き、反天皇闘争の各分野の第一線で闘われている人々を講師として迎え、「あらゆる差別の元を辿つていけば天皇制に行き着く」ということを繰り返し繰り返し指摘されたものであつた。

- ①若い頃から沖縄人民には深い理解を示し沖縄からきた小学生とよく会つて言葉をかけていたこと。
- ②その反面、小さい時から「将来、天皇になる」と言つてはばかりで、
- ③「日本帝国主義が米・英・帝国主義に敗けたのは武器生産能力と科学的に戦争する能力に欠け、精神主義に陥つたからである。」ここには全く帝国主義の侵略が戦争をひき起こしたことは全く考へておらず戦争の勝敗にのみ関心を示しているだけである。戦争の犠牲になつた人々のことなど全く眼中にないのである。
- ④の沖縄人民に理解を示して「たといふこともヒロヒトが沖縄に「巡幸」できなかつた為の代りではないのか。
- ④「皇室の伝統を見ると「武」ではなく、常に学問でした。歴史

上も軍服の天皇は少ないのです。学問を愛する皇室という伝統は守り続けたいと思います」

現在の「象徴天皇制」が本来の天皇制の姿であるとして平和的ポーズを示そうとしているわけであるが、「象徴天皇制」の下にありながら、現実には天皇制を根源とする様々な差別が渦巻いているのであり、我々にとつては象徴天皇制も打倒の対象でしかありえない。

⑤「自分は孔子より孟子の方が好きである。何故なら孔子の教えは臣下に対するものであるのに

孟子のそれは王候に対するものだからである」

ここにはあからさまに人民を統治していくという思想が表われている、小さい時から「将来、天皇になる」と言ってきたアキヒトならはのことである。

これらの発言は全て皇太子時代に折りに触れて「側近」、「ご学友」、記者に対して述べてきた言葉である。その意図する所は戦犯天皇ヒロヒトを補佐する任にある者としての発言でありヒロヒトを、天皇制を擁護するものであった。今後のアキヒトは新天皇という自

### 三・二六 三里塚現地闘争に決起せよ！

我々は同盟結成以来、反対同盟熱田派のもとに結集し、三里塚闘争を担ってきた。特に昨秋においては、三里塚現地への九・二五バスツアー、そして一〇・二九三里塚東京集会を組織し、二期決戦への決意も新たに十一・六現地闘争へと結集してきたのである。そして九〇年概成へ向けタイムリミットあと一年と迫った本年がまさしくこの闘争における正念場となることを全同盟一丸となって確認しなければならない。

破壊、バリケード封鎖に続き、昨年二・三月東峰バリケード封鎖、染屋かつさん宅破壊・焼却、さらにはC滑走路の木の根大トンネル、B滑走路予定地の小見川県道トンネル工事と空港公団は、二期工事へむけて全面着手し、五月二十日暫定開港十年を契機とした、二期促進キャンペーン、さらに公団総裁秋富による団結小屋・一坪共有地取用発言、石原運輸相による「土地は……国民全体が所有者」なる発言と、昨秋取用委再開へ向け、攻撃は執拗を極めたのである。かかる、公団からする攻撃に対し、

民党政府の「象徴」としての発言、行動を本格的に開始していくわけであり、自民党政府の意図した「象徴天皇」に天職を見出し出しているアキヒトである限り確実に「経済大国」「国際国家」日本を体現した「象徴天皇」として登場してくるであろう。我々はこのようなアキヒトに対しては憲法第一章の削除、すなわち象徴天皇制打倒を対置してあらゆる分野の反天皇闘争、反差別闘争を闘っている人々と団結して闘っていくであろう。

反対同盟を先頭とした支援反対勢力は、二月芝山町議選における石毛候補の当選、横堀墓地管理小屋の増築、三・二七現地闘争、五・二二三三里塚東京集会、さらには一〇月二日の県取用委への対千葉行動、十一・六現地闘争と一歩も後ろにひかない闘いを貫徹したのである。

ははつきり確認しておかねばならない。こうした意味において一部ブルジョアマスコミによる「脅迫キャンペーン」は断固粉砕してゆかねばならない。

この間の清井弁護団をはじめとした幾多の人々の努力により、すでに事業認定は失効しており、土地取用法では取用できないことが明らかになっている。しかしながら政府空港公団は、昨年十二月二十八日横堀公民館で検問に抗議した事を口実にテロ・リンチの末、重傷を負った人を含め十六名を不当逮捕し、公民館の破壊を行なった。また一月十三・十四日には、横堀の自主工作地十二ヘクタールを何の連絡もなく、バラ線で囲み込む行動にでたのである。佐藤新運輸相は「平成一年度概成の希望は捨ててない」とうそぶいている。

事業認定二〇年を前に、政府空港公団があらゆる策を弄した攻撃を加えてくることはあきらかである。我々にはかかる政府空港公団の攻撃に対し、用地内農民を切り崩させない、孤立させない闘いを、組織していかねばならない。

また事業認定二〇年を前にしてその失効を大胆に訴え、政府空港公団をして強制取用を断念せざるを得ないような政治的情勢をつくりだしてゆかねばならないであろう。我々はこれらの大衆的行動の中で二期攻撃との実力対決を最先頭

で担うべく組織的力量的強化を図って行かねばならないであろう。実力闘争こそが今日まで三里塚闘争を支えてきたこと、プロレタリア人民に勝利をもたらす最高の手段であることを忘れてはならない。我々は第二次強制執行における東峰十字路戦や開港阻止決戦における管制塔占拠闘争に次ぐ大衆的実力闘争の大爆発を待ち取り、もって三里塚空港を廃港へと追い込んで行かねばならない。

#### 反対同盟は

一、木の根をはじめ用地内の人々が……快適に暮らせて何年でも頑張っている、状況をつくりだす。

二、十二月十五日で事業認定が下されてから満二十年になる。二期工事の事業認定の失効を声を大にして世論に訴えてゆく。

そして木の根の源さんは「我々の土地を法によつてはとれない、土地を持っていては売らない限り絶対勝利できる、今年には勝利を記念すべき年、堅い団結で前進しよう」

と提起して、事業認定失効へ向け十一月現地闘争の前哨戦としての三・二六現地集会への総決起を呼びかけている。

我々は今春、三・二六現地闘争へ全力決起するとともに、組織活動に全勢力を傾注し、三里塚二期決戦へ向け我が同盟を強化してゆかねばならない。



# 資本論学習会を組織して

青木良雄

昨年、われわれは合計四回の「資本論」学習会をおこなった。さまざまな事情によって中断されながら、とりあえず第一篇商品と貨幣の第一章商品の全四節を終えることができた。

「資本論」は全三巻にわたる長大な書物である。副題が「経済学批判」となっているように、「資本論」はブルジョア経済学批判でもある。したがって、われわれはこの書物を真剣に学習することによって、ブルジョア社会の経済的運動法則について理解することができるのみならず、ブルジョア経済学批判についても学ぶことができるのである。とりあえず、われわれは第一巻を学ぶが、これは、プロレタリアートの理論闘争にとって重要である。

われわれは、宇野学派のような資本論解釈主義におちいってはならない。理論と歴史を切り離し、「資本論」を原理論なるものに純化しようとするのは、「資本論」の革命的魂をぬきとり、資本主義を永遠化しようとするにはかならない。資本主義は歴史性を刻印されているのであって、弁証法的発展によって共産主義の物質的

条件を生み出すのである。宇野派の科学主義は、資本主義を擁護するブルジョアイデオロギーであって粉砕されなければならない。

日共宮本派は、宇野派のうら返して、資本主義を搾取制度に一面化したり、資本主義の共産主義への移行の法則性なるものをデッチあげることによって、自己の革命運動に対する日和見主義を合理化している。

われわれは、「資本論」を革命運動の発展のために役立てなければならぬ。ブルジョアイデオロギーの攻撃は、マスコミをはじめとして、あらゆる手段をもって組織されている。自民党・民社党・公明党・社会党・共産党・社民連などの階級的性格は、「資本論」を土台とし、「帝国主義論」を導きの糸とし、現実の歴史的發展を正確に分析することによってのみ規定できるのである。昭和天皇が死んだ今日、われわれは大胆に革命運動を進展させることが問われている。

「資本論」の一部のみを取り出してきてあれこれと立場をデッチあげる狭い学び方を拒否しようではないか。「資本論」は体系的な

構築物であって、全面的に把握してのみ真理なのであり、階級分析に役立てることができるのである。マルクスが病苦と貧困の長年月にわたって書きあげた「資本論」は、われわれ闘うプロレタリアー

## 新左翼の総括と党建設の展望(上)

高橋 崇

### I 流れに抗して

「日本経済研究会」主催として第二回合宿を行った。

第一回にひきつづいて極くかぎられた人々によびかけた。このことは、われわれの集まりがどのようなイデオロギーと組織を継承しようとしているかを物語っている。

よびかける立場とよびかけられる主体にとって、ひとつの傾向を示して示していることは明かである。われわれは、基本的に自らの主張と運動が批判にさらされる様な生産的で独自の運動を形成するべきであると考えている。

七〇年代中端からあらゆる意味で世間の風潮は楽な道を歩みはじめてきた。この楽な道とは、大人も子供もそして、あらゆる階級闘争の局面においてもそうだとすることができると言える。このような風潮は、日本資本主義の帝国主義段階にお

トに贈られた貴重な遺産である。「マルクス葬送派」の無責任な歪曲や、ブルジョア経済学者の批判やスターリン主義者のネジ曲げ、反スタマルク主義者の一面化に抗して、われわれは理論闘争を組織

ける市民社会の成熟を示してはいない。いわゆる左翼の世界でも自らたたかいて組織し、そのたたかいてにおいて連帯し共同するのではなく、帝国主義的諸現象にまどわされることによって没イデオロギー化した。その典型が六〇年代中期以降日本共産党から除名され脱党した諸グループによる協商懇・建

党協であった。そのヤキ直しとも言うべき社会主義連合であった。マルクス・レーニン主義を現存的に主体化する道を階級闘争の試練のうち獲得しようとする道を自ら閉じて何が党建設と言いうるであらうか。たたかいての現場を曖昧化し、たたかいてを放棄したところに党など断じて組織できないこと

はいうまででない。あの連合赤軍の敗北のち雪崩うつ清算主義・小ブル急進主義批判はいまなおとろえたとは言えないのである。言い換ればこのような風潮こそ主流派なき混沌を物語っている。そこで

し、プロレタリアートの国際的革命運動を進展させなければならぬ。今年も「資本論」の学習会を継続しようではないか。

世間では楽な道、思想も主義も失い侵略と抑圧、差別と排外を無自覚のまま繰り返す唯一金融独占と国家がなんらの疑いもなく主流をなしている。

構造改革派につらなる諸分派ならびに急進主義を否定する諸分派は、主流派たらんとすることを放棄し楽な道を歩んでいる。

ところで、われわれが合宿を組織したのは、マルクス主義陣営におけるかかる楽な道を歩まんとする風潮に抵抗したからに他ならない。われわれは断固として逆流に抗して自力・自闘の党を建設しなければならぬ。

共産主義運動におけるひとつの道筋を提出し世の批判にさらすものである。われわれのこの試みと内容は公然と展開されなければならない。二回の合宿を踏まえたものとして、第三回以降はより大衆的に、より公然とよびかけられるであらう。

## II 時代の主流派を形成せよ

一九六七年秋からはじまる数年間の熱風は、日本階級闘争史上かつてなかった時代である。少年も少女も、労働者も学生もそして、大学教官といわず小ブル層の決起とあわせて、それぞれが身のまわりのものを武器としてたたかった。ボールペンや万年筆が武器として判決が下されたように、学生は、机やイスを農民は、クワやカマ、そしてコイダメのオブツを身にかぶり、さらには除草剤などまでもちだした。労働者は、ヘルメットとコン棒をもち工場からもち出せるものすべてを、そして知恵のあるかぎりを出しつくしてたたかった。

日本共産党員のなかから六全協と六〇年安保闘争の挫折によって市井にうもれていた多くの人士を、あの七〇年斗争はよみがえらせた。そして街頭化させたのである。

七〇年斗争の主役は「全共斗」運動と武装斗争派である。疑いもなく時代の主流派を形成した。

問題は、「主流派」が時代を自らの主体形成とともに、時代をわが掌中におさめきることができなかったことにある。ここに主体の敗北がある。この敗北は「テロリズムと経済主義」としてのみ反省し乗りこえられるようなものではないことは明かである。

七〇年「安保粉砕・日帝打倒」沖繩解放闘争における主流派は、党派たらんとしたブントであった。第二次ブントの結成、三派全学連と反戦青年委員会を全国的に牽引したのはブントである。しかし、ブントはそもそも、確固不拔の党建設、自ら党中央を担い、党を自ら組織するところのレーニン主義的組織観をもち合わせていない。世界観さえ統一されていざとい言いは時代を掌中におさめようなどという野望を具体的に展望することなどできなかった。ブントは、今の時をいかにたたかうのか、そういう運動、闘争者の位置を結成時からもっていた。このような気質は、第一次ブントにもあったと言うべきである。第二次ブントにあつては、第一次ブントよりもイデオロギーの組織化、既成政党、共産党とのたたかいを運動論的に乗りこえようとしていたというべきである。だが、ブントとは、なにか、ひとつの傾向を代表しているものとしての評価されるような同盟でなかったのである。むしろ諸雑多な傾向と運動をかかえたまま結成され再建されたのである。そうであるが故に世界党への可能性もまたあつたと総括すべきなのだ。

一切の核心は、われわれこそが共産主義者として革命党を建設しなければならぬということである。だとするならば楽な道、解党主義におちいることなく党中央を自ら建設することであり、前衛に対する忠誠である。むしろブントを一言で表現しようとするなら間違はなく反スターリン主義、マルクス・レーニン主義者の同盟であつた。反スターリン主義、マルクス・レーニン主義、すなわち、反代々木→新左翼→過激派である。このことの自覚にたつて総括作業と党建設は展望されなければならない。

時の主流派とは、まずもってブント→新左翼の総括を徹底化すること、そのことは自らの反スターリン主義・マルクスレーニン主義者としての立場を形成することであり、反スターリン主義陣営における主体的位置を明らかにすることになるであろう。

まさしく、合宿での革命理論の獲得とはかかる党派性の獲得にほかならなかつた。

第三に、われわれの政治路線たる「あらゆる闘争から議会・選挙闘争まで」を現在のには大衆的実力闘争・街頭闘争として貫徹する。このことを明らかにする上でも「新左翼の総括と党建設の展望」は意識化されなければならない。

## 東チモールの独立を支援しよう

昨年十一月十七日から十二月十三日まで東チモール独立革命戦線（フレテリン）から二人のジョゼが来日した。

ジョゼ・グズマオ（三六才）、ジョゼ・グテレス（二五才）、二人のフレテリン活動家は、虐殺の島、地図の上から消された島・東チモールでインドネシア侵略軍とのたたかいを報告した。同時に支援を訴えに来日したのである。約一ヶ月間、北は北海道から南は沖縄まで全国二十数ヶ所で小集会和交流会を重ねた。

八六年以降東チモール独立闘争を支援する全国数ヶ所の市民グループが全国調整委員会として活動

してきた。全国調整委員会・昨年から全国協議会は、約一年間の準備をもって今回の全国各地での集會を計画した。また、土井たか子江田五月をはじめとする国会議員団を組織した。

国会議員団は、十一月十七日來日した二人のジョゼの訴えを聞くと同時に東チモールの独立を支援するため、日本政府のインドネシアへのあらゆる援助の停止を記者会見をもってよびかけた。

東チモール民主共和国とは

東チモールは、インドネシアとオーストラリアの間の小スンダ列島の最東端にあるチモール東の東

半分である。一八五九年に西半分をオランダ領、東半分をポルトガル領に分割す協定がチモール人民の意志と無関係に成立した。チモール島は、さらに一九四一年から四五年まで日本帝国主義の侵略をうけることになる。日本帝国主義の敗北とともにふたたび西半分はインドネシア領に、東半分は旧宗主国ポルトガル領として植民地支配をうけてきた。しかし、東チモールは一九七四年ポルトガルの政変後の七五年十一月に独立を宣言した。ここに東チモール民主共和国は成立したのである。

この独立の直後インドネシアは十二月七日大規模な軍事侵略を開始した。

東チモールは約四国地方に匹敵し人口約六〇万と言われている。インドネシア侵略軍は、この十三年間に人口の約1/3、二〇万を虐殺した。ここに虐殺(ジノサイド)の島と呼ばれるゆえんである。そして地図から「東チモール民主共和国」は消された。

国連総会では、これまで六度東チモール人の自決権を賛成多数で可決している。にもかかわらず、インドネシアの侵略を正当化し承認しているのは北アメリカ帝国主義と日本帝国主義である。なかんずくASEAN諸国はおしなべてインドネシアの侵略を支持することによって域内の「平和」を維持しようとしている。

日本帝国主義の反革命介入を阻止せよ

二人のジョゼは異口同音に「日本の皆さんからの最大の支援は、皆さんの税金でもある日本政府のインドネシアへの援助を阻止して下さることです」と。そして二人は日本での印象を「北海道でアイヌ民族との交流、被差別部落での交流、広島での原爆の恐怖、なによりも沖縄での交流がとても忘れられないことのできない連帯であったと述べた。

われわれは、日本金融独占と政府のインドネシアへの投資と援助の全てに反対しあらゆる反革命介入の計画に断固反対してゆかなければならない。

われわれは、これまでも『プロレタリア通信』紙上で訴えてきたように、フレテリンを実践的に支援してゆかなければならない。とりわけ今夏北海道で行われる、世界先住民民族会議にフレテリンからの参加が予定されている。北海道でアイヌ民族を中心として計画準備されている世界先住民民族会議の圧倒的成功のため支援しよう。

## アニメ映画

「白旗の少女——琉子」

(少女は沖縄の戦場で何を思い何をみたか)

一月十四日、川崎労働会館でアニメ映画「白旗の少女——琉子」が上映された。土曜日にもかかわらず午後2時、4時の2回の上映は満席であったとのことである。私は仕事の都合上、午後6時の上映に会社の沖縄出身の同僚を誘って観に行った。上映はこの日一日だけで、ビデオになればもっともっと多くの人々に観てもらえるのに、と残念に思われた。アニメ映画ということで子供も多く来ていたが、小さい子には難しく、多くの子は会場で中で遊び回っていたが、それでも小学校へ入っている子供は真剣に観ていた。それも主人公「琉子」の出ている場面は楽しく観ていたが恐い顔をした皇軍日本軍が出てくると「恐い」と言っ顔をそむけてしまうのが印象的であった。

「琉子」が明るい子供に描けていて母親や妹と死に別れて一人、戦火の中を渡り歩いていく中で、この世の地獄を見てしまった、人間性を失い、屍体の山の中を無感動に歩いていく場面の連続でハラハラのしどろしどろだったが、暗い感じはなかった。

これらは「生き残った人々の証言をもとにして描いた」という原作者の言葉にもあるように沖縄における日本軍の罪状を正面から暴き出して出色であった。

映画は最後の場面で敗戦によって日本軍は消えうせたが、それに代わって米軍が沖縄全土を支配している現状を写真をもって描き出し沖縄人民の反軍斗争はまだまだ終わっていないことを訴えていた。見終わって一時間ちよつとの時間がすごく短く感じられた。帰りにパンフレットを買って家へ帰ってもう一度繰り返して読んでみようと思ったものだった。

原作、新川明、儀間比呂志共著

画面は全体的にとっても美しく導入部で沖縄の自然が描かれている場面では原色で、さらさらした草花で画面がいっぱい、沖縄の亜熱帯地方の生活がよく描けていた。そのあとはすぐ一転して戦争場面の連続になるのであるが、主人公

